



嬉泉の新聞 第57号 2005年(平成17年)3月発行(年3回発行)

発行所=社会福祉法人嬉泉

東京都世田谷区船橋1-30-9(〒156-0055) TEL 03-3426-2323

http://www.kisenfukushi.com E-mail:kisen@kisenfukushi.com

発行人=石井哲夫

編集人=友田 篤

「自閉症者の“言葉”と刑事裁判〈ちょっと待ってくれよ〉」

弁護士 副島 洋明

自閉症スペクトラムの人たち(以下、アスペルガー障害の人を含む)の刑事弁護をやってきて、今、私は司法の場でこの人たちの言葉、つまり、しゃべる日本語の“意味”を弁護人の私がいまどこまで理解し、それをどうやって警察・検事・裁判官にわかってもらうか、という問題で悩んでいます。司法の世界では、自閉症を「心を閉ざし、ひきこもり、精神変調をきたした人」(浅草事件・取調検事の証言)とする誤解がいまだにまかり通っています。そこに自閉症への“理解”をもちこむことは、まだまだ大変なことです。例えば、悲しいとか反省するとかいう言葉の“意味”も、彼らはしばしば〈よくわからない〉といいますが、しかし、司法関係者は悲しい・反省するという言葉がしゃべることができるのにわからないはずはない、と決めつけています。確かに私も、それは気持ちかわからないということなのか、それともその言葉を私らのように使えないということなのか、よくわかっていません。悲しむ、憎む、怒るといった人間としての“情感”のところでは私のコミュニケーション(意味の相互理解)ができないのに、どうして人を殺す・傷つけるとか、人のものを盗む・だますとかの犯罪行為(言葉)の意味を日本語として共有しうるのか、そこを司法関係者が自分の理解で決めてしまうことが疑問に思えるわけです。精神科の医者でも、本人がしゃべったとされる言葉の意味をよく確かめもせず、精神医学的に異常かどうか、危険かど

うかの診断をしています。

裁判所法や刑事訴訟法などの法律では日本語で裁くと定め、日本語を話せない人(外国人・聴覚障害者)には通訳・手話をつけ、日本語をしゃべる日本人にはコミュニケーションの日本語が通じること前提にしています。日本人で日本語を話せれば、国語辞典の意味を程度の差はあれ、共有しているものとされています。〈どうして殺したのか〉〈どうしてだましたのか〉という言葉の意味が〈よくわからない〉という彼らの問題をどう理解し、弁護するのか。私は彼らが刑事や検事にしゃべったとされる自白の供述調書や、法廷での話し言葉のやりとりをみて、〈ちょっと待ってくれよ〉〈本人がその日本語をどのような意味で使っているのか確かめてくれよ〉というんですが、聞いてはくれません。それはマスコミにもいえます。彼らがしゃべったとされている言葉をもって、しばしば奇怪な動機だなどと騒ぎ立てていますが、しかし、その言葉は警察の取調べの中での「創作」ではないのか、本人がその意味をどう理解しているのか確かめてくれ、といいたい気持ちにかられます。

我が国の司法では、この人たちは日本語をしゃべることで本当に“損”をしています。そして、まだその不利益をわかってくれそうにはありません。私の〈ちょっと待ってくれ!〉という弁護は、これからもしばらくはつづくでしょうね。

社会福祉援助論

石井 哲夫

— その20 —

民間社会福祉援助者

最近、施設としてあってはならないこととして、施設の職員が利用者に対して暴行等、人権無視の行為をしたことが報じられている。まだそんなことをする職員がいるのかと思うと情けない。そのような事件を気にして、行政はその検討を始めるという。しかし、そのことで施設全てがマイナスのイメージを持たれ、地方自治体の施設政策が悪化していくことで、現実的に施設に依存しなければ生活できないという本当に救済が必要な利用者や家族の悲惨さが増していかないようにして欲しいと思っ

ている。今、施設の存在を悪としていくような行政の状況を残念に思っている。

こういう事件は、それを生むシステムこそ問題であるということ

であって、これは外から取り締まれるというものではない。施設内の問題は、職員の良心からの告発や、家族からの指摘を受けて、初めて明らかにされていく。職員間で悪の放置が行われていることは、主として理事者や施設長の無責任な管理にあり、その体質を変える必要がある。まず施設長の資格審査や研修組織を徹底的に検討して、実施していくことである。

私は、長年この施設長資格を厳しくすべきであるという主張を行ってきた。その理由は、今まで多くの施設長たちと出会ってきたが、立派な施設長のいる施設では、見習いたいような工夫が常になされてきていたし、きちんとした理念に基づいて、事業が運営されてきていたことを知っている。その一方で、その資質が不十分と思われる施設長にも出会った。こういう

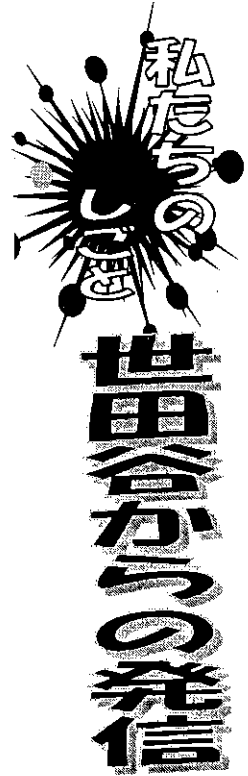
人たちを放置しておいてはならないと思った。

施設に就職した経験者なら誰でも感じる必要な「リーダーシップ」とは、施設長の良識と決断にある。良識が無く、決断できないリーダーの元で働くことは実に大変である。「民主的」という言葉が悪用され、放任の状態におかれている施設は好ましいものではない。かつて、私は、全国社会福祉協議会で「施設長資格を検討する委員会」が開かれたときその座長を務めた。この委員会の報告書が出されてからしばらくして、全国保育協議会で、「保育所長講座」が持たれるようになって来た。又前後して、中央福祉学院にも「施設長資格講座」がもたれるようになってきている。

このような傾向がもっと盛んになってきてくれるとよいと思っ

の削減が行われていることで、施設に関する攻撃が手放しで起きてきている。

社会福祉法人嬉泉にも、何人かの施設長がいるが、トップに私がいるせいなのか、施設長たちが、私に依存的になりやすい。管理者として、この時勢をどう考えていくかを発言するものがない。言うまでもなく、専門職としての障害児者援助を行う我々の気持ちは、決して甘いものではない。毎年就職を希望するものも数多くいるが、残念ながら、退職するものも決して少なくない。職員である支援者に対する私の指導が厳しいからである。今のうちに、民間社会福祉事業に対して、毎年厳しく経費削減が行われ、しかも援助すべき利用者も年ごとに厳しい困難な問題を呈しているようになってきたこのごろ、汗みどろになって、疲労しても働きつづけている支援者を守らないと、社会福祉の現場が崩壊してしまう。そして、ここに記念碑だけが残るといふ結果では困るのである。



めばえ学園とすこやか園
の交流保育

今年度より、めばえ学園(知的障害児通園施設)とすこやか園(保育所)では、交流保育を実施しています。以前より行なっていました。主に行事の時などで、回数も少なく、お互いに少々敷居の高いものになりがちでした。そこで、今年度より「交流保育をもっと活発に」ということで、職員間で交流保育のあり方について検討がなされました。その中で、まずは「子どもたちが共有できる場を増やそう」ということが目標となり、共有の場である園庭や屋上で共に過ごす時間を積極的に作る、互いの保育室を開放するなど、そのことを行なっています。現在は、その中で子ども同士のごく自然な交わりを見守っているところです。

(めばえ学園 坂田由紀子)

● めばえ学園より

私が所属するめばえ学園のさわやか組・なごやか組(主に3歳児から5歳児)では、遊びの時間に保育室を開放しています。そこには主に、すこやか園の風の子グループ(3歳児から5歳児)の子どもたちが遊びに来ています。めばえ学園の保育室にはトランポリンがありますが、すこやか園の子どもたちが一緒に遊ぶことで、めばえ学園の子どもたちにとって楽しさがいつもの二倍にも三倍にもなるようです。その中で困る出来事がありました。すこやか園の子どもがトランポリンを跳ぶ時に、「何人まで?」と先生に聞き、「2人まで」と言われると、そのルールを守って順番で跳んでいるのです。そのように、すこやか園では集団の中で約束が自然なこととして成り立っています。しかしめばえ学園では「楽しそうだからほくも跳びたい」という気持ちを大

切にしている、あまり細かいルールはありません。ですから、交流保育の中でできた「トランポリンを跳ぶ人数」というルールに、私が一瞬戸惑ってしまったのです。その後、合同の職員の打ち合わせの場では、そのことについて話し合い、共通理解をもつようにしました。

今後、両学園の垣根を越えていくことで、一人ひとりの子どもへの声かけも変わってくると思えます。お互いが関心をよせて、子どもたちがごく自然に成長していくことを見守っていきたくと思っています。

(めばえ学園 田組 愛)

● すこやか園より

「ほのぼのさん? 行くー!」とすこやか部の部屋を出ていったたのしみグループ(2歳児)の子ども達。ルンルン気分です。部屋に入った瞬間、固まり、私の回りにピタリとくっつき棒立ち。その後は玩具に助けられて何とか部屋に入り、ひたすら玩具で遊びそそくさと戻ってきました。これが大緊張で始まったためえとの交流保育、第一回目でした。

その後めばえの職員と、「子ども達の緊張した様子」や「嬉し

そうにすこやかの子どものそばに寄って来ためばえの子どもの様子」
「職員同士もお互いに少し固くなっていたこと」等を率直に話し合い、交流保育がスタートしました。

2回目からは、私自身がめばえのお子さんの名前を呼んで、楽しく遊んでいる姿を見せよう、と思えました。そのうち自分からめばえの職員に「このお友だちのお名前は何?」と聞きにいく子、自己紹介をしていく子など、子どもの様子も少しずつ変わってきました。

それから回を重ねるごとに屋上で入り混じって縄跳びや追いかけっこしたり、おもちゃの取りあいをしたり、一緒に製作をしたりと、子ども達の自然に触れ合う姿も見られるようになってきました。

この交流を通して、私自身、沢山のことを教えられました。まず私自身がすこやか、めばえ、といった区別をすることなく、一人一人のお子さんとも楽しく交流することが大切だと思いました。子どもたちはそんな私の姿を良く見ている、そして子ども達も自然と意識することなく、交流するようになるのだ、と実感しました。

(すこやか園 米ノ井美穂)



赤塚からの発信

『板橋安心ネットについて』

富田 順三

今回は赤塚福祉園を含めた板橋区内の主に知的障害者支援に関わる学校・施設・団体が取り組んでいる『板橋安心ネット』という活動についてご紹介したいと思います。

皆さんは『警察プロジェクト』(略してK-プロ)という名称の活動についてお聞きになったことがあると思います。自閉症を含む知的障害児者の権利擁護という視点から全国規模で行われた活動で、警察に障害の特性等を知ってもらい、不当な扱いから不利益をこうむることを避けようとする啓蒙活動でした。この『K-プロ』から各地で様々な発展が生まれています。

例えば、『たのんますー』
これは大阪での活動の一つです

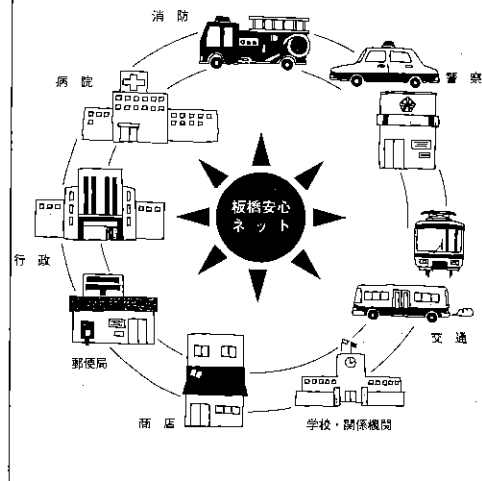
が、地域生活支援の一環でコンビニなどにパンフとコミュニケーションボードを配布し、障害者理解を深めるだけでなく対応してもらおうというもの。協力店の入り口にはこんなシールが貼られるそうです。
障害者を取り巻く環境や地域で生活する上で必要な日常的な理解・



板橋安心ネットのご案内

みんなの笑顔 明るい未来

～知的障害者が地域で安心して暮らせる街づくりをめざして～



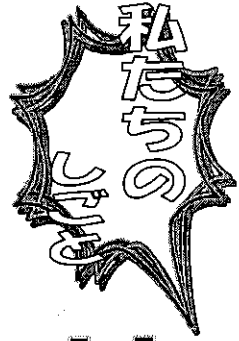
支援などを考えたとき、警察・消防・病院・交通機関・・・様々なことが想定されますし、実際こんな事で困ったという切実な問題が浮かび上がってきます。

板橋では知的障害のある人が悪質な犯罪、トラブルに巻き込まれたりしないようにと区内の知的障害児者の親の会が中心となって『板橋安心ネット』という活動グループを立ち上げました。その設立メンバーに区内授産施設の係長が数名含まれていた関係でお声が掛り私が赤塚を代表して参加して

います。その後消費者被害(デパート商法、訪問販売など)についての学習会に力を注いだり、地域の交通機関への働きかけなど地道に活動を広げています。

今まで個々の団体が警察を訪問したり交流をしたりという動きはあったのですが、組織的に活動することでより多くの区民に関心を持っていただき、障害児者が『安心』して暮らせる地域作りが出来たらと願って活動を続けております。

(更生施設支援員)



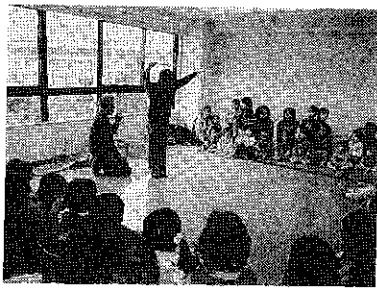
袖ヶ浦からの発信

「からくり独楽」来る

一尾 弘志

嬉泉後援会代表世話人の前川長慶さんの奥様、前川千寿子さんのご友人で、兵庫県西宮市在住の枇杷さんご夫妻が、ボランティアで「からくり独楽」を披露してくれました(二日間で世田谷と袖ヶ浦の二箇所の事業所で)。

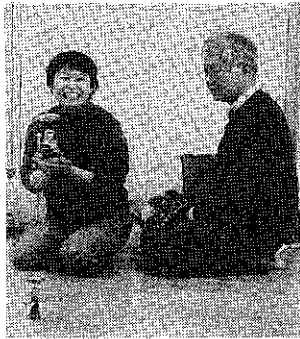
枇杷さんは、趣味で集めた独楽二千個あまりを、ただコレクションするだけではつまらない、まわ



「子どもの生活研究所」での独楽まわし

して遊ぶう…という思いから、少しでも独楽まわしが普及すればいい、独楽で喜んで下さる方々がいい、独楽…と退職後、関西方面を中心に、保育園、児童館、子ども会、老人ホーム…等で実演をしています。

「独楽まわし」というと、刀の上で独楽をまわしたりする大道芸をイメージしがちですが、まわっている独楽から一寸法師や桃太郎が出たり、大きな独楽から大・中・小・極小の独楽が次々に出たり、音が出たり…と実にさまざまです。



「はみがき」コマ!

た。中でも、人形が歯磨きをした。り、そばを食べる独楽には思わず微笑んでしまいました…。

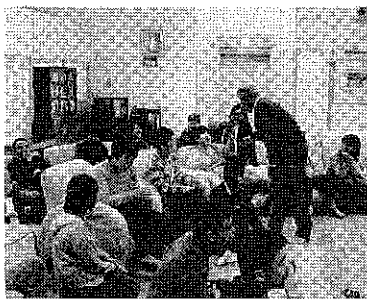
二月九日の「子どもの生活研究所」でのパフォーマンスでは、お子さんが楽しそうに独楽をまわしたり、からくり独楽の話にのってきたり…盛り上がりました。最近では、独楽をまわしたりすることは少ないと思いますが、昔も今も楽しさには変わりがないな…と感じました。

翌日、二月十日の「袖ヶ浦ひかりの学園」では、どうだろうか? 利用者が注目してくれるだろうか? と、枇杷さんも少し心配な様子でした。否、支援員の方が心配していたのかもしれない。

「独楽」のパフォーマンスが始まると、枇杷さんは利用者の状態をみて、「子どもの生活研究所」とは違ったプログラムに修整していききました。途中で、利用者と一緒に独楽をまわしたりしました。実際に独楽をまわしてみると、よく状況に集中したり、とても上手く独楽をまわす利用者が出てきました。その辺りを、枇杷さんは経験で、臨機応変に探っている様子でした。

実演をする前は、皆さんが飽きるようだったら早めに切り上げる…等とお話していましたが、結果は十三時から十四時の余暇時間をフルに使って、パフォーマンスをしていただきました。

「独楽まわし」を通しての「交流」を目的にしたりして、日々の活動においても、その利用者なりの参加の仕方があり、また支援員の柔軟な姿勢が求められるということであらためて感じさせられました。



利用者一人一人と独楽をまわす

今年、海外(シアトル)でも「独楽まわし」を予定されているとか…。これからも益々活躍の様子です。また、利用者と良い交流が出来ればと思っています。

(袖ヶ浦ひかりの学園支援員)

私たちの TOMOKAWAの音

東京都自閉症・発達障害支援センター

東京都自閉症・発達障害支援センター（以下センターと表記）は、平成十四年一月に開所し、すでに二年が経過しました。日本で初めて誕生した自閉症や発達障害の人を対象にしたセンターとして、大きな期待を寄せて下さっている方がいる反面、まだまだ、その存在が知れ渡っていない現状があります。

この度、この紙面の頁を継続してお借りし、センターからの発信をさせていただくことになりました。より多くの方にセンターでの業務、そこからうかがい知ることのできる多くの知見をお知らせして行きたいと思えます。

初回は、現在のセンターの業務内容の概略を紹介します。

【自閉症・発達障害 支援センターとは】

自閉症などの発達障害の人とそのご家族が、安心した暮らしを営むことができるよう、その総合的支援を行う地域の拠点として、平成十四年度より国の新施策として発足しました。平成十六年度末までに、全国に二十ヶ所が設置される予定です。

【利用対象】

ご利用いただけるのは、

- ① 東京都在住の方で、
- ② 発達障害（自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害など）をお持ちのご本人とご家族、施設の方、学校の先生、職員の職の方、行政や相談などの機関の方など、関係するすべての人が対象となります。

【サービス内容】

センターでは、現在、大きく分けて4つのサービスを行っています。

① 相談

日常生活に関わるさまざまな相談をお受けしています。

そして、必要に応じて、以下の②～④のサービスをご利用いただくことができます。

② 相談形式としては、本センターにおける外来相談（一回一時間）と電話相談（一回三十分）をお選びいただいています。

③ 情報提供・ご紹介
福祉制度やその利用のしかた、支援機関など、それぞれのニーズに応じた情報提供を行っています。

*現状として、公的機関でも民間機関でも、利用者にとって必要なサービスが整備されていないことが多々あります。利用者が必要とする支援の内容を明らかにした上で、よりよい情報を提供したいと考えています。

④ 関係調整・
コンサルテーション
障害をお持ちの方が、家庭

学校、施設、職場などで適応できるように、より良いサービスが受けられるように、周囲の方との関係調整を行っています。逆に自閉症や発達障害をお持ちの方を支援されている方で、この人たちのことを理解できなかったり、どう対応してよいかわからないといった場合、それぞれの現場の具体的な場面を通して、障害内容についての話しやアドバイスなどを行っています。

④ 普及啓発・研修

発達障害をお持ちの方が地域で暮らしていくためには、障害内容や特性、対応の仕方などについて、より多くの方にご理解いただくことが必要不可欠と考えています。療育講座や講習会を開き、一般の方から家族、学生、関係機関の方まで、広く普及啓発に努めています。社会福祉施設、学校、行政職員など支援者のための研修も行っています。

（支援員 北川 裕）

嬉泉トピックス

ご案内

◆第2回高機能広汎性発達障害セミナー

日時：平成17年5月

27日(金)～28日(土)

会場：O.V.T.A(財)海外職業訓練協会(J.R.京葉線・海浜幕張駅)

テーマ：発達障害の支援のゆくえん

定員：80名

(定員になり次第締め切り)

参加費用：30,000円

(宿泊費・朝・夕食代・懇親会至費・資料代含む)

* お問合わせ

社会福祉法人嬉泉

(担当：柳・谷田)

03・3426・2323

報告

◆発達障害療育研究会

第9回研究会

去る1月22日、発達障害療育研究会の第9回研究会が開催されました。小さな研究会ですが、会

員は医療・教育・心理・福祉・行政等の分野で我が国を代表する方々が多く、メンバーの中心を構成している少数精鋭の研究会です。

研究会のテーマは「広汎性発達障害の人々に対する継続的な支援システム」特に発達障害者支援法との関連について」という今後大きな課題となる先験的な内容でした。

特別講演は、今回の担当幹事である東海大学の山崎晃資教授による「広汎性発達障害をめぐる諸問題」として、ライフステージに沿った地域の支援システムの未整備な状況や発達障害児医療の乏しさ、臨床の専門性への危惧などの講演がありました。

午後は、このたびの発達障害者支援法成立に向けて中核的な役割を担った衆議院議員の福島豊氏を迎え、石井会長との対談により、法成立の背景・経緯や法の内容・ねらい、今後の課題等分かりやす

い説明がありました。そして引き続きシンポジウムでは、厚生労働省の山崎晋一郎企画課長補佐から新しい「障害者自立支援法」もまじえた説明があり、市川宏伸都立梅ヶ丘病院長からは発達障害医療の乏しい現状と課題提起、また、全国自閉症者施設連絡協議会石丸晃子会長からは親の立場と団体の立場からの指定討論がありました。参加者からも鋭い質問や問題提起があり、活発で有意義な研究会となりました。

◆(研究会事務局長 友田 篤)

◆ 第27回嬉泉祭りバザー
去る2月20日(日)に、袖ヶ浦に於いて、第27回嬉泉祭りバザーを開催いたしました。

前日は雨に祟られ、会場の設営が殆ど出来ず心配しましたが、当日は晴天に恵まれ、また職員一同が頑張った例年より一時間早く準備に動き出すことで、無事開場に漕ぎつけることができました。

今回のバザーは、地域の「祭り」であることを強く意識して、地元(袖ヶ浦市消防音楽隊による演奏、木更津警察署による警察車両の展示、長浦久保田太鼓保存の会による演奏、日本マレーシア協会による

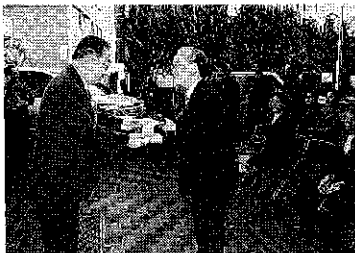
民族舞踊演舞など)を、グラウンドにステージを組んで行いました。またその屋外客席を取り巻く形で食堂の屋台を配置するという新しい会場設定の仕方をしたところ、お客様に大変ご好評を頂きました。最終的な売り上げの集計は出ていませんが、前回を上回ることは間違いなく、非常に手応えの感じられたバザーでした。

最後のなりましたが、皆様には数々のご協力を賜りましたことに熱く御礼申し上げます。

◆(バザー総務 石井 啓)

◆ご寄付のお礼

世田谷区の仲介で北沢遊技場組合より、車輛のご寄付を頂き12月3日に世田谷区役所中庭にて贈呈式がおこなわれました。利用者の送迎、日中活動等に活躍しています。この場を借りて御礼申し上げます。



世田谷区長より須藤理事長へ
ゴールドキーの授与。

ひかりのタイムズ

独立第51号

今号の「ひかりのタイムズ」は、音楽と絵画(陶芸)という芸術活動を行っている飯田さんと市川さんに最近の活動について原稿を寄せて頂きました。

『今年のピアノコンサート』

飯田真奈子

今年、一月三十日(日)に、毎年行われる、ピアノの発表会で、去年に続き、私は、市民会館で、リチャード・クレイダーマンの名曲を、三曲弾きました。「ほほえみのパネッサ」、「バンドラの旅」、「男と女」です。

夏から練習に打ち込んだため、今回は、本番では、まごつかず、うまく弾けました。(去年は、左手が迷子になった)しかし、大ホールで弾く時は、やはり緊張します。

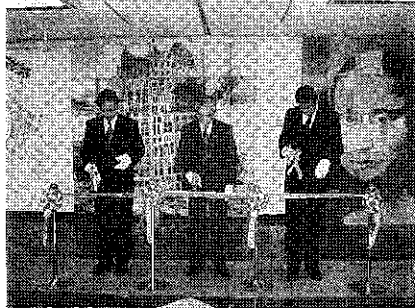
音楽というのは、聴いている人が、有名な曲であればあるほど、

間違ったり、迷ったりして、変な曲に聴こえてしまつては、絶対いけない!と思いました。

昨年、夏から秋にかけて、お店の、有線放送の機械の調子が悪くて、(店内では、常にイージーリスリングの名曲が流れている)私がよく知っている曲が流れた際に、音が消えたり、飛んだりして、すごく変な曲に聴こえて気になって、しようがなかったです。「人のふり見てわがふりなおせ」という言葉があり、人ごとではないと思い、本番で間違えたら、いけない、特に、右手のメロディーを間違えたら大変だと思い、本番にかけて、一生けん命でした。その結果、今年、緊張したものの、三曲ともうまく演奏出来て私自身、とても嬉しかったです。人前で音楽をやる、ということの大変さを、身にしみて毎年感じていきます。

(グループホーム・春のひかり利用者)

平成十七年二月一日(六)日まで、船橋市民ギャラリーにて、『第八回ほっと日ふなばし芸術祭』(事務局・紙好き工房空と海)が開催されました。いろいろな人たちの芸術文化活動を毎年紹介し、社会参加とノーマライゼーションの実現を目指している活動です。アートリエ・アウトスは、第一回の芸術祭から作品を展示してきました。



一番右が市川さん。タイミング良くカット!

今回、作家を代表して、アトリエ・アウトスの市川浩志さんが、オープニングでテープカットを行いました。そのときの市川さんの率直な感想文です。

『ホットインふなばしのこと』

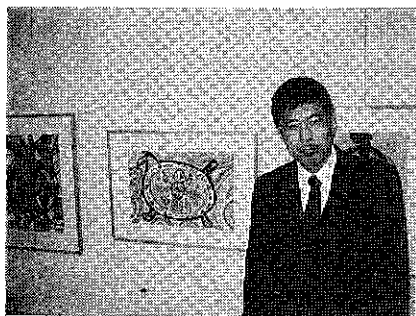
市川 浩志

今回はじめてホットインふなばしに行ってテープカットしたが、げきをすこしみて、あとはさくひんを見ただけどふつうだった。さようみはなかった見たがおもしろい物はなかった。

チャボのえとか、けしきのえとかがあったけどふつうだった。

さんこうになるものはなかった。だからデザインした方がいいと思つた。

食べものも出なかった。だいひょうでテープカットをしたが、たのしいのはそれだけ。あとはふつうだった。



最新作『ピザアラジン』の前で...

(袖ヶ浦ひかりの学園利用者)